

# 櫻 島

種子田 定勝

わが胸の燃ゆる思にくらぶれば

煙はうすしさくらしまやま

清澄明朗なる錦紅湾の彼方に白煙立上る活火山——櫻島、それは優美にして雄大なる景観と有史時代に起った数度の大爆発とをもって世界的に知られた火山である。

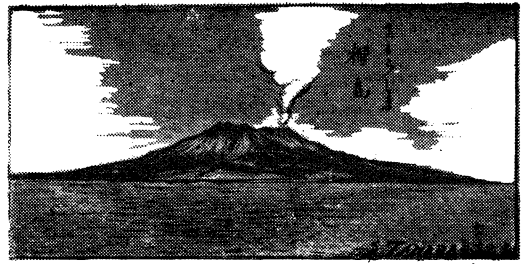
櫻島——島と言っても大正3年の大噴火の結果、溶岩流は大隅半島との間にあった瀬戸海峡を埋没して今は陸続きである。この火山は概観上簡単な円錐状を呈しているが、実は複雑な構造を有するものである。中央部は急斜面をもって隆起し、海岸に下るに従って漸次急斜面となり海に没する。この中央の隆起部は北から南に並ぶ三つの岳に分れ、順次北岳・中岳・南岳と呼ばれ、何れも海拔1100m前後でそれぞれ火口を有しているが、北岳のものが最も古いとされている。この三つの円錐丘に加えて数個の寄生火山と山腹から噴出した溶岩流とが、この火山の主な構成体である。岩質はいづれも“輝石安山岩”に属する。

この火山の基底はやや楕円形に近く、海岸線の延長は約60kmに達する。西岸には大正噴火の溶岩流が鹿児島市の前面に突出して一大半島を形成している。これに続いて袴腰（ハカマゴシ）と呼ばれる一辺の長さ400m余りの三角台地が突出している。北西海岸は出入り少く、僅かに藤野崎・初崎・阿弥陀崎があるのみで海岸一帯砂浜であるのに反して、東方及び南東海岸は主として文明年間以来の数度の噴火により流れ出した溶岩地帯であって、屈曲に富み岬や湾が多く、割石崎・瀬崎・大燃崎・舞岬・観音崎・燃崎などの岬角や高免・黒神・有村・湯之などの小湾があるが、多くは断崖峻角でわずかに20噸程度の小型船が発着し得る。

山麓の斜面には耕作が営まれているが、河川なく、土質が貧弱で沃度が少く、耕地は狭い。併しながら気候温暖で、且つ島民の労働力と農事の改善によって果樹根葉に見るべきものあり、櫻島大根・櫻島蜜柑・枇杷などは名声を博している。

風光明媚なることはわが国にも他に比類するものが少いところで、度々起る大噴火の悲惨事は、人々の最も怖れるところであるが、山麓の住民は如何なる惨事の後も帰来つて再びここにその生活を営むのである。

温泉は昔は有名なものが多かったが、度々の噴火のため溶岩に埋没されて、現在では古里温泉が知られている。



櫻 島

行政上は東西両櫻島村に分かれて鹿児島郡に属していたが、東櫻島村は昭和25年鹿児島市に合併された。鹿児島市と袴腰・湯元・古里・有村の間に舟便あり、これらの中第3棧橋（鹿児島市）と袴腰間が最も便利である。

火山活動の歴史は和銅元年（708年）が最も古く、俗にはこの時向島（櫻島の古名）が湧出したと言われる。その後781年・764年後数年間の活動の記録がある。次の大活動は文明の噴火として知られているもので1468年——1476年に3回にわたって大噴火した。次いで安永の噴火（1779年）、大正の噴火（1913年）、昭和21年（1945）の噴火が大きくこれら有史時代の活動では南北両山腹から溶岩を噴出した。

溶岩の化学成分の中  $\text{SiO}_2$  の含量を記すと、文明溶岩66.35%：安永溶岩64.13%：大正溶岩61.04—59.01%：昭和溶岩610%である。

大正噴火の際流出した溶岩がついに海の中に流れこみ、瀬戸海峡をうずめてしまった。そのあとで、もう一つ面白い事が起った。と言うの鹿児島湾の付近が噴火後土地の沈降を生じたのである。これは櫻島の噴火で大量の溶岩（約15億 $\text{km}^3$ ）や浮石などが噴出されたために、これらがもとは入っていた「マグマ溜り」が空洞になり土地が沈降したのだと考えられる。この沈降の中心が櫻島を南端とする北部鹿児島湾の略々中央に当り、その辺が海底が比較的平坦であり、この北部鹿児島湾底は阿蘇火口原にも比すべき大火口原であったと解する考え方もあるのである。

参考館は櫻島の玄関に当る袴腰（舟着場）にあり、櫻島の地質・生物・人文・歴史などの資料を集めて陳列し、説明を附して一般の観覧に供するもの、西櫻島村営（昭和24年開設）でその着想は敬服に値する。

火山観測所は鹿児島地方気象台に属し、袴腰に近接して、大正第一期溶岩上に450倍率の微動地震計を設置して観測に当たっている。今後の成果を期待している次第である。

景観については他の機会に述べることにするが、その秀麗さを朝な夕な賞ずる鹿児島市民は、いつの間にか櫻島の色彩、かすみ工合によって、天気を予知する習慣を体得(?)している様であると結び度い。

(九大地質教室)